

事業の概要

1. 目的

リサイクル飼料について、家畜・家禽を用いた消化試験、近赤外分析法による一般成分の簡易分析法等を検討し、配合飼料原料としての利用を推進する上で必要となる栄養成分分析法および栄養価表示基準の設定に資する。

2. 事業の経緯

平成 12 年 6 月に「食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律（食品リサイクル法）」が公布されて以来、ホテルや給食施設、食品工場等から排出される食品残渣を飼料原料や有機質肥料として活用する試みが活発化し、実際に比較的大規模なプラントで製造されたリサイクル飼料の配合飼料工場への供給が始まっている。食品残渣をリサイクル飼料として再利用することは、わが国において恒常的かつ大量に排出され続けている食品廃棄物の総量を抑制するばかりでなく、飼料原料の大部分を海外からの輸入に頼っているわが国の配合飼料の自給率向上による畜産の持続的発展を目指す上で極めて重要である。

しかし、これらリサイクル飼料は、当然のことながら原料自体が多様である。しかも、リサイクル飼料は種々の処理方法により製造されることから、その成分組成だけでなく、家畜・家禽における利用性の変動が大きく、標準的な栄養価を設定することが困難であり、配合飼料原料としての利用が大きく進まない一因ともなっている。

このため、農林水産省では、リサイクル飼料の配合飼料原料等としての利用を促進するためには、栄養成分や栄養価の迅速かつ簡易な栄養価の評価法を確立し、表示の基準を設定する等の必要があるとして、平成 12 年度よりこれらの調査・研究を企画し、事業の実施を社団法人日本科学飼料協会に委託した。

本会では、事業を実施するにあたり、学識経験者、配合飼料製造関係者およびリサイクル飼料製造関係者等に委員を委嘱して事業推進委員会を組織し、調査方法および調査結果の検討をお願いした。

3. 調査の方法および検討結果

平成 16 年 6 月 11 日に開催された第 1 回事業推進委員会において、本年度の調査対象、調査方法等を検討した結果、本年度は、製造方法や原料の異なるリサイクル飼料を新たに収集し、これまでの作成した検量線を用いて近赤外分光光度計

(NIRS) 推定値の精度を確認するとともに、12 種類のリサイクル飼料について豚における消化率および栄養価、鶏における代謝エネルギーを測定して NIRS による栄養価推定の可能性について検討を行うこととされた。さらに、豚および鶏を用いた試験において、製造工程での処理温度が消化率や栄養価に及ぼす影響についても検討することとされた。

この決定に基づき、本会科学飼料研究センターで各種試験を実施し、その結果を平成 16 年 3 月 18 日に開催された第 2 回事業推進委員会で検討し、本報告書を取りまとめた。

4. 事業推進委員会

平成 15 年度事業推進委員会の委員は以下に示したとおりである。

(順不同、敬称略)

阿部 亮	日本大学生物資源科学部動物資源科学科 教授
甘利雅拡	独立行政法人農業生物系特定産業技術研究機構畜産草地研究所 畜産環境部排泄物制御研究室 主任研究官
石橋 晃	社団法人日本科学飼料協会 理事長
井上 謙	全国農業協同組合連合会 飼料畜産中央研究所 研究開発部長
亀岡暄一	社団法人日本科学飼料協会 顧問
川島知之	独立行政法人農業生物系特定産業技術研究機構畜産草地研究所 家畜生産管理部飼料評価研究室長
川村悦春	中部飼料株式会社 取締役研究技術部門総括
北川順矩	三造有機リサイクル株式会社 顧問
鈴木 貢	中央カンセー株式会社 技術顧問
堀 弘義	日本配合飼料株式会社 中央研究所長
山口秀和	株式会社セブンイレブン・ジャパン環境推進部 総括マネージャー